



TITLE:

展観「維新資料展」開催 - 尊攘堂  
遺品より -

AUTHOR(S):

---

CITATION:

展観「維新資料展」開催 - 尊攘堂遺品より -. 静脩 1967, 4(4): 5-5

ISSUE DATE:

1967-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36424>

RIGHT:

とその周辺は昔の面影を残している。逆に、生きている中世都市さながらの古都クラクフ（クラコフ）の大学図書館は、皮肉といえるほどヨーロッパでも屈指の近代的なものであった。

クラクフ市はポーランド民族の誇る由緒ある文化・学問の都市の名にはじない。1964年に600年祭を祝賀したこの大学は、創立者の国王の名にちなんで「ヤギェウオ大学」と正式に称され、コペルニクスも学んだという講義室や図書室もある。たしか、若い日にポーランドに滞在したド・ゴール大統領が、つい先日、大満悦でこの大学を訪問しているが、たんなる観光的価値以上に、中・東ヨーロッパの名門を誇っており、近代化をとげた大学自体の規模はワルシャワ大学をはるかにしのぐものがある。

霧に煙る冬の夜、王城から旧大学地区にかけて黄金時代のポーランド中世に帰った気分でも市外に向って10分も歩けば、巨大な各学部、博物館、学生寮などと並んだ図書館に達する。ヨーロッパの風雲が急を告げた第二次大戦の開戦の年に完成したこの図書館は、豊かとはいえなかったこの国の、今は国の片隅になった古都にそびえていることとあわせて、あたかも民族の魂の結晶とでもいうべき、ある一種の宗教的モニュメントの感じを与える。

大学の案内書によれば、蔵書数は約150万を数え、さらに、70以上の各学科図書室の約65万にのぼる書籍の管理にあたる中央大図書館である。

春が訪れて、復活祭の後には、試験や論文で学生のざわめきが廊下によみがえるが、私には冬の夜、激動の世紀に残ったこの国の古都の星空を眺めつつパンをかじっては、またしても暗い閲覧室に消えていった若人の後姿が異様に想い出されてならない。歴史の現段階でも、風雲に耐えつつも知的活動を支える宝庫ともいうべきものが図書館であるということを痛感できたことは私の貴重な体験の一つである。（編集者註：中山氏は昭和31年に本学文学部西洋史学修士課程修了後、昭和37年より同41年までポーランドに3年、オーストリアに約1年留学されました。現在京都産業大学講師）



## —— 展 観 ——

### 「維新資料展」開催

#### —— 尊攘堂遺品より ——

読書週間にちなむ秋期恒例の展観は、さる11月7日から同10日までの4日間、本館陳列室において開催された。今回の展観は表記のごとく「維新資料展」と銘うって、本館創設時より伝わる「尊攘堂」遺品を陳列したもの

である。

この「尊攘堂」遺品については、年輩の方はご存知であろうが、維新の志士の一人で、のちに内務大臣となった品川弥二郎元子爵が、同志であった人々に関する資料と、彼等からその節義をしたわれていた先人たちに関する資料を収集して、本学に寄せたものである。

今回は、特に今までの展観で陳列されたことのなかったものを中心に選んで御覧に供した。

貼交屏風、貼交書幅など、幕末の志士が品川にあてた書簡を貼りまぜて、屏風や、幅にしたもののほか、高杉晋作の大型肖像額、品川弥二郎木像、水戸烈公撰の歌かるたなど合計31点を陳列したが、多くは20才台で若い生命を散らした志士たちでもあり、熱心にその筆跡に見入る観覧者で連日にぎわった。